

五重のすすめ

一、「重」ということ

重という字には二つの意味があります。

一つには重大(重い)ということで、浄土宗にはこれほど重大な教えは他にはありません。最も大切な教えであります。また、お寺にしましても早くても四、五年、檀家さまの少ないお寺では十年、二十年に一度しか勤められない、重要な行事であります。また参加される皆さん方には、人生における重大な転換期になる。今までとは一味も二味も違った目で世の中を見る事ができるようになるのです。

苦しみから 楽しみの世界へ
悲しみから 喜びの世界へ
闇から 明るみの世界へ
邪から 正の世界へ

と移り変わって行く重要な日となります。ですから、重という字を用います。

二つには、重ねるとも読みます。初重から二重、三重そして最後に第五重と重ねていきます。浄土宗の最も大切な教えを誰でもが理解できるように、順序よく積み重ねてあるということです。

「五重相伝の一番大切な所は最後の第五重の伝法にあるのだから、それだけ聞けば充分だ」「また五日間も六日間も通いつめることはない」

「初日と終わりの日だけでいい」などと考える人も中にはいるかも知れません。

近ごろ街へ出ますと、大きいビルが次々と建てられています。大きい建物にはしっかりとした基礎が必要です。

日本の古い建築物に五重の塔があります。その一番肝心な所は、一番上の九輪にあります。もっと詳しく言えば、その上の方に水煙というものがあって、そこに如意宝珠がありま

す。これが、塔の魂のこもっている所と言われます。それならば、この一番大切な所から先に造りつけて行けばどうか、そしてその下に五階、四階と取り付けて最後に基礎となる土台を作る。現代の進歩した機会を使えば不可能なことではないかもしれません。巨大なクレーンで吊り下げてつくるか、一年も二年も飛びつづけるヘリコプターを使用するか。どちらにしても、夢のような話です。

やはり基礎からはじめて、一階、二階そして最後に九輪を取り付けるべきでしょう。五重相伝も初重の修行をした上に、二重をかさねて行く。二重をよく理解した上に三重を積んでゆく。そして最後に正伝法を受ける。

その順序よく重ねて行くことによって、非常に理解しやすく組立てられています。

五つの、重大な教えを重ねて行く。この二通りの意味から、五重相伝という名称になったものと思われれます。

二、法然上人とお念仏

今から八百六十年余り前に、長承二年(1133)四月七日、美作国久米の押領使、漆間時国と妻秦氏の間で男子が誕生しました。生子のなかった夫妻は大変喜び、この子に勢至丸と名付けて、蝶よ花よと大切に育てあげました。九歳の時に父時国が、源内武者明石定明という悪者の夜討ちを受けて四十三歳で落命するという悲惨な事件に遭遇しました。

この時国が最後に残した遺言が少年勢至丸の心に大きい影響をあたえました。「これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすばば、その仇世々につきがたかるべし。しかじはやく俗をのがれいゑを出て我菩提をとぶらい、自らが解脱を求には」

怨をはらすに怨を以ってすべからずということでもあります。勢至丸さまはこ

篤く三宝を敬え 三宝とは
仏、法、僧なり
仏.....いのちの親
法.....不可思議な力
僧.....仲間達

の遺言に随ってただちに同国の那岐山菩提寺の智鏡房観覚得業のもとで仏道修行の道に入りました。久安元年(1145)十三歳で上洛、比叡山に登り、西塔北谷の持宝房源光を師とし、更に十五歳で東塔皇円阿闍梨について登壇受戒、『天台三大部』を学ばれました。行学共に衆に勝れ、「恵解天然にして秀逸のきこえあり」とほめたたえられる程になりましたが、「自分は一体何のために比叡山に登って来たのか、学者になるためか、また一山の棟梁にでもなって栄達の道を求めるために来たのであろうか。いやそうではないはずだった。すべての罪深い愚かな人たちの救われる道を求めてこの山に登って来たのであれば、このままであってはいけない」と久安六年(1150)九月十二日、時に十八歳、西塔黒谷の青龍寺に慈眼房叡空上人を訪ねました。

叡空上人は、大原の良忍上人について、天台を学び、当時比叡山ではかくれなき学匠であり、また円頓菩薩戒の正しい継承者でした。またこの青龍寺には報恩蔵という経蔵があって一切経五千七百巻がここに収められてありましたので、叡空上人のお人柄とこの一切経を慕って訪ねられたのでありましょう。叡空上人はこの若き求道者を見て、「十八歳にして早くも隠遁の心を起こせりまことに法然道理の聖かな」と、比叡山での最初の師、源光阿闍梨の源と叡空の空を取って、法然房源空と名付けられたということでもあります。ここで四十三歳までの二十五年間の鑄り修行をされるのです。

二十四歳の保元元年(1156)にはじめて京の街に降りて、まず嵯峨の清涼寺釈迦堂に七日間の起請をこめ、

数々の学者を訪ね、更に奈良の都に足をすすめて、先徳たちを歴訪して教えを請うたのです。

「よろずの智者に求め、諸の学者にとぶらびしに教うるに、人もなく示すにともがらもなし」

と当時のご心境を語っておられませんが、どの学者の教えも上人の求める道とは程遠いのでありました。再び比叡山に帰って来まして、今度は真実の法を求めて、十九年間に及ぶ山籠りの生活をおすごしになります。

そして、父時国公が往生された四十三歳の歳になってはじめて、唐の善導大師の『観無量寿経疏』の中の一文にお気づきになりました。

「一心に専ら弥陀名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」

この御文によって、阿弥陀如来の御慈悲の心に随って、お念仏さえ申せば、どのような人でも必ず救われてゆくという、これこそ私のような愚か者には唯一の有り難い教えであるとお悟りになりました。

直ちに一切の余行をすてて、専修念仏の行者となり、現在の総本山知恩院の地において、人々にお念仏の法をお弘めになりました。

それより四十有七年、八十歳の健暦二年（1212）正月二十五日にご入滅になりました。

法然上人には沢山のお弟子がいましたが、二代目をおつぎになりました聖光房弁長上人、三代が記主禅師良忠上人、四代白旗寂慧上人と次第しまして七代の聖阿上人に至ることになります。

三、五重相伝のはじまりと現代の五垂

インドにお釈迦さまが出現なさいましたのは二千五百年前のことであり、その教えは非常に広般な教えで、種々の宗派になり日本へも伝わってまいりました。そして日本の文化の発展にも大きく貢献しました。

しかし法然上人までの仏教は、貴族社会の人々のものであり、時には政治にも関与したり、また一般の人々から離れて、山の中で修行する山岳仏教で

あったり、鎮護国家を祈る、貴族や武士・僧侶等の特別階級の人たちのものであったりしました。法然上人があられて、はじめて一般大衆の教えとなったのです。

この大衆仏教の浄土宗が開かれて、七代目の聖阿上人の時に、浄土宗の教えの中で最も重要なものを五つに分けて、これを理解しやすいように順序よく組立てて、その弟子西誉聖聴上人に相伝されました。これが浄土宗の五重相伝のはじまりです。上人ご入滅後百八十二年後のことでありました。

これも最初の頃は三年五年と十分に学業を積んだ僧侶に対してのみ授けられたのです。在家の方ではじめて受けたのは、徳川家康の七代前の先祖、松平親忠公で、文明七年（一四七五）に三河国大樹寺（現愛知県豊田市嶋田町）の開山勢誉愚底上人について、百日間の前行を行い、最後の日の深夜に至ってはじめて相伝の儀式が行われたといひます。

それ以来、浄土宗の信徒の皆さんは必ず一度は参加し、中には再伝と言って何回も参加される方もあるようになりました。今日に至るまで、長い伝統と厳粛な儀式によって受け継がれてきたものです。

現在は、各地域により、またそれぞれの寺院の伝統により、勤め方に若干の相違はありますが、大体五日間から七日間で、朝九時ころより夕刻五時ころまでが普通のようなようです。お数珠や経本、白衣（浄衣）等はお寺で用意して下さることが多いようです。

参加される方のことをお同行と呼びます。老若男女、身分の高低、学歴のいかんは一切問わず、みな同じ志を持って信仰の道を歩ませていただく、これを同行というのです。

昔はこれに参加することを大変な慶事として、親しい人たちや親戚の方などから、お見舞いやお祝いをいただき、またそのお返しに心をなやませること等もあったようですが、今ではこうした習慣はほとんどなくなりました。服装も質素なもので、平服でいいのです。ただ清潔なもので華美にならない事が大切です。

お焼香の意味と作法は？

焼香の意味は亡くなられた方や、諸仏、諸菩薩は「香食身」ともいって、お香はなによりもごちそうであり、お供物なのです。そして、その香りは、供える人の身と心を清浄にし、心身のすみずみにまで行き渡るものであることから、すべての人々に差別なく行き渡る「仏の慈悲」をたたえるためのものともいわれています。すなわちお焼香は、私達の真心を捧げる行為にほかならないものなのです。

さて、その作法ですが、抹香の場合の焼香作法を取り上げてみましょう。

お導師から焼香の案内がありましたら、

導師に合掌一礼して、焼香台の前に進みます。

焼香台の前で、ご本尊あるいは遺影をあおぎ、合掌し一礼します。

合掌のとき、数珠を左手首にかけて、右手の親指、人差し指、中指の三本で軽く香をつまみます。

つまんだ香を上に向けながら左手の掌でうけるようにして額のあたりにささげます。

香をたきます。

今一度、ご本尊、遺影をあおぎ、合掌礼拝し、二、三步さがり導師に、葬儀のときは喪主にも一礼して退出します。

以上が基本的な作法ですが、真心をこめて、丁寧かつ敬虔な態度で行うことです。

さて、もう一つ問題があります。それはの香をたく回数です。一回、二回、三回、いずれでもよいのですが、普通は一回に真心をこめて焼香していただければ結構です。

焼香の回数のいわれ

一回は一心不乱、二回は戒香(教えの香)と定香(静けさの香)をたいて智慧の火で供養するとの意、三回は貪(むさぼり)、瞋(いかり)、癡(おろかさ)の三毒煩惱を焼き尽くし清浄をたもつこと、または仏、法、僧の三宝に供養する意味とされています。

